

オンラインディスコースにおける「文化批判」に見られる人種主義

— アニマルライツ団体の事例から —

木場安莉沙(名古屋文理大学) 張応謙(大阪大学大学院生)

1. はじめに

本研究は、アニマルライツ団体の SNS 上の言説の分析から、オンラインディスコースの(再)生産プロセスを明らかにすることを目的とする。同様の対象について分析を行った木場・張(2022)では、「動物への虐待行為」の主体が非西洋圏(特にアジア圏)の地域・人物である場合には民族や文化への非難が多くなるのに対し、主体が西洋圏の地域・人物である場合には行為に及んだ人物の心理状態など、個人への非難が多くなり、民族・文化への結び付けは殆ど見られないことを明らかにした。また、この違いには“the West”を“*We*”とし、“the East”を“*They*”とする *We/They dichotomy* (Barreneche, 2020) が関与していること、この二項対立化が新型コロナウイルス感染症(以下 COVID-19)を契機に増加したと言われるアジア人ヘイトの背景にあること(Gover et al. 2020)を指摘した。本稿は Kim (1999) や Holliday (2017) に見られる、「人種としての文化」に関する議論を中心に据える。Holliday (2017) によれば、現代の批判的社会学においては人々の振る舞いを「他の文化」によって定義・予測しようとする試みは人種主義なのであり、「文化」はもはや「人種」の婉曲表現として用いられるようになってきている。これに先立って Kim (1999) は、公民権運動以後、人種に関する主張は公的書類から消えた一方、社会集団の「文化」に関する言説という形で捲土重来し、近代において「文化」は「タブーを言うためのコード」として機能するようになったと述べている。Kim によると、アジア文化を本質化して解釈するプロセスは、アジア系アメリカ人を本質的に米国文化に馴染まない他者として構築する排除の過程に深く関与している。本研究は、以上のような文化にかこつけた人種主義は COVID-19 流行を契機に台頭したアジア人ヘイトにも見られることを主張し、それが横行するようになったと言われる 2020 年のデータを対象に分析と考察を行う。分析対象としてイギリスに拠点を置くアニマルライツ団体の Facebook アカウントを取り上げ、動物への虐待行為に対する批判を含む 2020 年 3~5 月及び 7, 9, 11 月の投稿をデータとして扱う(COVID-19 との関連から、「文化」への言及を含む投稿は 3~5 月に最も多く見られたが、その後は COVID-19 に触れた投稿及び「文化」に言及した投稿が大幅に減少したことから、効率的にデータの傾向の変化を追うため、データ収集月を一月ずつおいて 7, 9, 11 月のみ収集した)。分析は 2 名の研究者が批判的談話分析の手法を用いて行い、投稿内容と各投稿への直近 30 件前後のコメントから「文化」に関する議論が含まれるものを抽出し、オンラインプラットフォームにおける「文化」に関するディスコースの生成に焦点を当てる。

2. データ例

本研究の分析対象であるアニマルライツ団体の Facebook アカウントにおける投稿の主な内容としては、動物虐待や野生動物の殺害・売買等を行う個人・団体(国や地域を含む)を批判するものが多く、コメント欄にも批判対象への攻撃的な文言が多い。本稿ではこうしたコメントのうち文化やその類似概念に言及したものを取り上げ、「文化への批判」が実際にはその文化に包含される/文化の実践者とみなされる人々、ひいては特定の人種への中傷と結びついていることを示す。culture/cultural の他、tradition/traditional, life style, practice 等類義的に用いられていた語も分析の対象とした。この結果、以下の図に示されるような傾向が見られた。

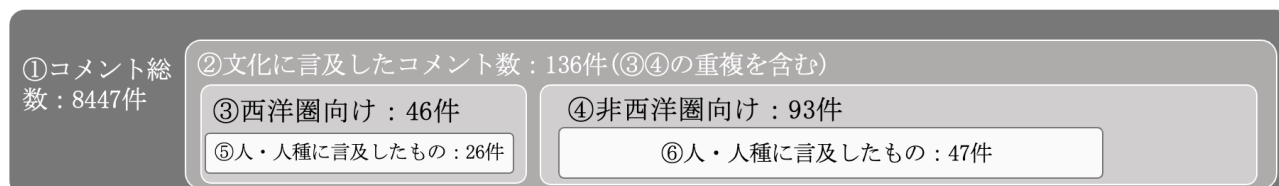


図1. 文化及び類似概念への言及があったコメント数とその傾向

図の内容について補足しておく、③の半数以上は当該アカウントがしばしば取り上げているスペインの闘牛と関連したものであった(46件中25件)。また、文化と併せてその実践者とみなされる人々への言及があったコメントの出現率には地域によって大差が見られなかったが、そのうち明確に人種に言及したもの(Asians, Chinese等:形容詞としての使用は省く)は非西洋圏(主にアジア圏)に対するコメントのみに見られた(9件)。④の殆どはcultureやpracticeといった語の直前にbarbaric, disgustingといった否定的な語が付随したものであり、④のうち内容がはっきりと否定的でないものは1件のみであった。③のうち内容が否定的でないものは4件見られ、いずれも「文化」をむしろ保護すべきものといった意味で用いていた。④には、COVID-19と関連した内容も多く見られた。

まず、③(文化等への言及がある投稿/コメントのうち、西洋圏に向けたもの)及び⑤(③のうち、その文化に包含される人/人種への言及があったもの)のデータに見られる傾向を、具体例から見てゆく。例1は、スペインの闘牛を批判する投稿へのコメントである。()内の日付はコメントの送り先の投稿がなされた日付を指す。なお強調は筆者による。

<例1> Death to these old horrific cultures. humans are hollow soulless creatures. (2020年7月31日)

動物への扱いを批判するコメントにおいて、文化及びその類似概念は例1のように「廃すべき文化」といった文脈で使われたり、或いは「動物虐待は文化ではない」といった文言に使用されていた。文化と併せてその文化を実践するとみなされる人々への言及が見られたコメントの多くは、代名詞“they”或いは例1の“humans”ように不特定の人々を指したものであり、特定の人種に言及したものは⑤には見られなかった。一方、文化及び類似概念を肯定的な(少なくとも否定的でない)意味合いで用いていたものの殆どは、⑤に観察された。例2は、エルメスが食肉・皮革生産を目的として、オーストラリアにワニ及びその他爬虫類のファクトリーファーム建設予定地を購入したことを批判する投稿に見られたコメントである。このコメントの語数は400語に及び、下記はその一部抜粋となる。

<例2> This has been an acceptable practice for eons as has the use of animals skins for leather and this goes back centuries. What is the difference between harvesting crocodiles for meat and their bi-products or any other animal that undergoes the same process. (2020年11月13日)

コメントは採取の過程が人道的であり、一般的な畜産動物への扱いと変わらないと繰り返し強調しており、下線部から明らかなように「長年にわたり継承される慣習」であることを根拠にワニの皮革採取を擁護している。例3はニュージーランドで16歳未満の子供向けに開催された野生動物の狩猟コンテストの是非を問う投稿へのコメントである。

<例3> [投稿: What do you think of this? Some might think it's fine they're killing feral animals hurting the natural environment. Others might think think children should not be out there killing for fun and prizes.]
コメント: I grew up with the exact life style in NZ. If you don't kill the pest they will destroy NZ forest. Possums were introduced to NZ for the fur trade at the turn of last century. It's part of our (NZ) history & culture. (2020年3月6日)

通常、当該アカウントにおける投稿では、動物への残虐行為・殺害は文脈に関わらず厳しく批判されているが、上記の投稿では中立的な立場が取られ、これへのコメントには「ニュージーランドの文化である」ことを根拠に擁護するものが見られる。これに対し、非西洋圏において「文化/伝統的に」行われる野生動物の畜産・狩猟等(中国における熊胆の採取など)に関する投稿では、“Culture needs to change” “Tradition is not a proven valid reason”といったように、「文化/伝統」であることを動物への扱いを正当化する根拠としてみなさないコメントが多かった。

では、④(culture等への言及がある投稿/コメントのうち、アジア及びその他非西洋圏に向けたもの)及び⑥(④のうち、その文化に包含される人/人種への言及があったもの)のデータではどのような傾向が見られるだろうか。例4は、COVID-19の感染拡大を機に中国で多くのペットが捨てられているという投稿へのコメントである。

<例4> Fucking had enough of the Chinese and their shitty practices! (2020年3月1日)

このように文化やその類似概念と特定の人種を並列して非難するコメントは、非西洋圏(主にアジア)に向けたコメントのみに見られ、西洋に向けたコメントには見られなかった。④のうちアジアの事例を取り上げた投稿・コメントには、

COVID-19 とアジアの文化等を関連づけたものも散見された。以下は「更なる感染症の流行を予防するには中国、アジア、アフリカが科学に耳を傾け、野生生物マーケットを閉鎖するしかない」と主張する投稿へのコメントである。

<例5> It's all over the world. Asian culture. Asians have wet markets and eat and torture cats dogs and many others animals here in Oz. (2020年4月7日)

このように、COVID-19 を特定の文化／慣習と結び付けたコメントや、その文化を实践する（とみなされる）人々への否定的な文言は、アジア以外の非西洋諸国／地域にも向けられていた。例6はアフリカ全土及び「極東 (far East)」のウェットマーケットをCOVID-19 の発生源として批判する投稿へのコメントであるが、コメント全文は約1000字に及ぶため一部を抜粋した。

<例6> I am not sorry for what I am about to say but the CHINESE, ASIAN, ARABIC, and AFRICAN, MARKETS with their bush meat and killing of one wildlife after another is too F'KED UP! These STUPID acts of killing, torturing, farming, hunting, and eating anything that walks or want to eat is just a bit too much!!! Sorry, If they DIE from some DISEASE, let it continue to happen and hope nobody helps them with aid. Why waste good money on a culture that has no respect for LIFE of any species. (中略) Also, these people and cultures have learned absolutely nothing! After the virus broke out and patients are recovering, it has been business as usual. I am not one to be racist for I have a little of Asian in me, however what this country and others like them deserve every thing and worse coming to them. (2020年4月3日)

コメント前半（中略部以前）では、“Chinese, Asian, Arabic and African”の文化が「いかなる命にも敬意を払っていない」ゆえに、これらの文化に属する人々は病（COVID-19）に罹患して死ぬべきである、と述べられている。後半では先述の人々・文化が“these people and cultures”と言及されているが、非難の矛先が例1のような「人類全体」、或いは“they” “we”のような総称主語ではなく、明確に他者化されたカテゴリーであることに留意したい。抜粋箇所最後の文においては、自身にも「アジア人の血が少し流れている」ために「(自分は) レイシストではない」と前置きしつつ、先述の国々に何が起ころうとも当然の報いである、と文を締め括っている。このように書き手自身を「(少なくとも部分的には) アジア人」としながらも投稿・コメントの中で非難されている「アジア文化」「アジア人」を他者化する試みは以下の例にも見られる。例7は、ベトナムとカンボジアにおいて犬肉・猫肉の消費が増加したとする投稿へのコメントである。

<例7> What's wrong with "these " people. They are Pets (friend of human like a family member) in my culture (Mongolia). Just can't understand them why doing this a horrible thing. Please don't eat or kill them. (2020年4月18日)

上記の例では“these people (Vietnamese, Cambodian)”と“my culture (Mongolian)”の間に明確な線引きがなされ、「アジア」全体を非難する他のコメントへの抵抗が見受けられる。しかし、当該アカウントやそのフォロワーがアジアを画一的な文化共同体とみなしていることへの批判的姿勢はあくまで示唆的なものに留まっており、書き手は当該アカウント及びフォロワーと同じ立ち位置から“these people”を非難するとともに、「彼らとは違う文化」として自らの立ち位置を構築している。これらのデータを踏まえて、オンラインディスコースにおける「文化」及び類似概念と「人種」との関連について、次章で考察を深めてゆく。

3. 考察

前章で見たデータの傾向をまとめると、(a)動物への残虐行為を批判するコメントのうち文化及び類似概念に言及したものは、西洋圏よりも非西洋圏に向けたものに多く見られた（約2倍）。また、(b)文化及び類似概念と併せて特定の人種に言及したコメントは非西洋圏（主にアジア）に関するものだけに見られ、アジアの文化等をCOVID-19 と結びつけたものも多かった。更に、(c)西洋圏に向けたコメントでは、文化／伝統であることを根拠に投稿内で批判されている動物への扱いをむしろ擁護するものが、非西洋圏に向けたコメントよりも多かった。これらの傾向の背景には何があるのかを、データに見

られるレトリカルなストラテジーと併せて考察してゆきたい。まず、上記(a)及び(b)については、1.で触れたKim (1999)の議論が参考になる。Kimは、米国社会におけるアジア人支配には、支配的グループ(白人)が従属的グループ(アジア系アメリカ人)を市民としてのメンバーシップや政治体から排斥するために、文化/人種的に白人と相容れない永遠の外国人として構築するプロセスが関連していると指摘する。換言すると文化を他者化することは人種的排斥と地続きなのであり、西洋文化は「われわれ」の文化とされるのに対し、非西洋文化は「他者」文化として指標化される。これを踏まえると(a)の結果は、従属的人種グループの文化は指標化されやすく、ゆえに文化に言及すること自体が人種的含意を持つことを示すものとして解釈できる。(b)でアジアやCOVID-19への言及が多かった理由については、対象データが書き込まれたのが感染拡大から間もない時期であったことが挙げられる。しかし、そこに「文化」という指標が差し挟まれることで、従来アジア人/文化が受けていた他者化がCOVID-19という新しい文脈の中で前景化され、「他者性」がより強力なイデオロギーとして生産されるのである。例4・5のように否定的評価とともに人種と文化が並列されることで、両者を否定的に結び付けるイデオロギーは強化される。更にKim (1999)は、アジア系アメリカ人/アジア文化の本質主義的解釈が、アジア系アメリカ人のサブグループ同士及びアジア系アメリカ人とアジア人の間に、二重の排除(double elision)を引き起こすと述べている。例6・7はこのことを端的に表しており、いずれも書き手が「アジア人/系」としてのアイデンティティを呈しながら、非難されているような「アジア文化」と一線を画し、自身は「われわれ(西洋)」側の目線から「他者/彼ら(アジア)」を批判する、という立ち位置を取っている。例6の最後の文は「私は人種差別をする人間ではない」という文言から始まり、「しかし(彼らに何が起ころうと当然の報いだ)」と続く。ヴァン・デイク(2011)は民族問題についての日常会話に関する談話研究の結果観察された特徴の一つとして、「肯定的な自己呈示と、否定的な他者呈示という二重のストラテジー」(ヴァン・デイク, 2011; 203)を挙げ、話し手が「私は彼らにまったく敵意を感じていません。でも・・・」「偏見のように聞こえるかもしれませんが。しかし・・・」といった表現によって、「文化差に対する寛大さの規範に従う」自己を呈示する一方、否定的な主張を続けると例示している。「しかし」以前の内容は、その後の内容を述べるにあたって話し手の面子を守るための手段として付け加えられるのである。また、ヴァン・デイクは、このようなストラテジーは個人だけでなく内集団全体を防衛する目的でも用いられると指摘しているが、(c)の結果は西洋文化に対する肯定的な自己呈示を示している。西洋文化に言及する際に例1のように総称主語を用いたり、例2・3のように文化相対主義的価値観を持ち込む(一方、非西洋文化にはそのような態度を取らない)ことで、西洋文化への否定的評価は和らげられる。本章の内容をまとめると、西洋文化は「われわれ」の文化、非西洋文化は「他者」の文化として呈示され、尚且つそれらには人種ヒエラルキーを反映した意味付けが適用されるのである。

4. 結論

本稿では前年の発表で深く追究することができなかった「文化」と人種的ディスコースの関係について考察した結果、「文化」が「人種」の言い換えとして人種差別的ディスコースに用いられているという先行研究の指摘が現在もなお有用であることを再確認した。しかし、COVID-19に関するイデオロギーとの連関が見られるなど、昨今の社会的背景に根差した特質が観察されたことから、Kimの言う「市民権からの排斥」プロセスやヴァン・デイクの言う「人種差別の否認」ストラテジーが、時代に応じて新たなイデオロギーを取り込みながら展開される点を強調しておきたい。

参考文献

- Barreneche, S. M. (2020). "SOMEBODY TO BLAME: ON THE CONSTRUCTION OF THE OTHER IN THE CONTEXT OF THE COVID-19 OUTBREAK". *Society Register*, 4(2), 19-32.
- Gover, A. R., Harper, S. B., & Langton, L. (2020). "Anti-Asian Hate Crime During the COVID-19 Pandemic: Exploring the Reproduction of Inequality". *American Journal of Criminal Justice*.
- Holliday, A. (2017). "Native-Speakerism". In John I. Lontas (ed.), *The TESOL Encyclopedia of English Language Teaching*.
- Kim, C. J. (1999). "The Racial Triangulation of Asian Americans". *Politics & Society*, 27(1), 105-138.
- 木場安莉沙・張応謙 (2022). オンラインディスコースの(再)生産過程と「人道主義」の中のヘイトーアニマルライツ団体の事例から一, *社会言語科学会第46回大会発表論文集*, 26-29.
- テウン・ヴァン・デイク (2011). 談話に見られる人種差別の否認 植田晃次・山下仁(編) 「共生」の内実: 社会言語学からの問いかけ 三元社 pp.187-229.